

## 岐阜市ゆかりの文学年表【小説】

岐阜市を主要舞台とした近現代(明治～令和)の文学作品のうち、小説を掲載・刊行年順で挙げています。

注1: 文筆を職業とした作家が執筆した作品

注2: 発行者が一貫して岐阜市内である文学雑誌に掲載された作品

注3: 児童文学作品は除く

年	作家名	作品名	岐阜との関連	掲載誌又は単行本刊行年月日	単行本刊行時の出版社	収録資料(所蔵分のみ)
明治 42 (1909)	森田 草平	煤煙	主人公が帰郷する場面から始まり、6章までの舞台が岐阜である。その後、東京に戻った主人公はある女性と親しくなっていく、その運命に翻弄されるかのようになり、心中へと向かっていく。主人公は著者自身である。	『朝日新聞』 明治42年1月1日～5月16日	金葉堂	明治大正文学全集29 現代日本文学全集22・42 ※岩波文庫版所載
明治 44 (1911)	森田 草平	初恋	岐阜は初恋の人の面影の風景となった地でもある。心躍らせる主人公の描写がタイトルを彷彿させる。作品の前半は、遊郭のあった金津(岐阜)が舞台で、主人公は著者自身である。	『中央公論』 明治44年12月(273号)	春陽堂	明治大正文学全集29 森田草平短編名作集 現代日本文学全集42
明治 45 (1912)	森田 草平	十字街	岐阜は思むべき血縁の地、不義の証拠を見せつける地だと思ふ主人公。伊奈波神社前の十字路がタイトルの由来である。	『読売新聞』 明治45年6月7日～大正元年8月28日	春陽堂	岐阜県文学全集1
大正 9 (1920)	里見 弴	桐畑	少年時代から4度も同じ女性に恋をした主人公と友人、その後、主人公と結婚した女性をめぐる物語。恋愛心理に関する描写が光彩を放ち、主人公が新婚旅行で長良川の鵜飼を見物する場面がある。	『國民新聞』 大正9年7月5日～8月4日 大正9年10月11日～12月9日	太陽堂	岐阜県文学全集1 日本文学全集21 ※岩波文庫版所載
大正 12 (1923)	川端 康成	南方の火	岐阜の寺に預けられた少女を、主人公とその友人が訪ねる。著者の初恋を題材とした作品群(ちよもの)の一編で、同名の作品を『文学界』昭和9(1934)年7月号にも発表している。	『新思潮』 大正12年8月		川端康成全集第2巻 川端康成初恋小説集 「篝火 非常 南方の火」
大正 12 (1923)	森田 草平	輪廻	全編岐阜を舞台に展開する。父の子なのか、母の不義の子なのか、出生(血筋)の秘密に悩む主人公の愛憎相反の心理を描く。	『女性』 大正12年9月号～14年12月号	新潮社	明治大正文学全集29
大正 13 (1924)	川端 康成	篝火	主人公の大学生が岐阜の寺に預けられた少女を訪ね、婚約する。この作品は、著者が大正10(1921)年9月16日、10月8日に来岐したときのことを元に描かれている。	『新小説』 大正13年3月号		川端康成全集第2巻 川端康成初恋小説集 「篝火 非常 南方の火」
大正 13 (1924)	川端 康成	非常	主人公が、婚約した少女から結婚はできないという手紙を受け取り、岐阜の寺を訪ねる。大正10(1921)年11月9日に著者が岐阜の寺を訪ねた時のことが題材となっている。	『文藝春秋』 大正13年12月号		川端康成全集第2巻 川端康成初恋小説集 「篝火 非常 南方の火」
大正 15 (1926)	川端 康成	彼女の盛装	婚約者からあなたとは結婚できないという手紙を受け取った主人公が、岐阜を訪ねるが、婚約破棄は覆らない。その後、彼女は上京してカフェに勤める。	『新小説』 大正15年9月号		川端康成全集第21巻 川端康成初恋小説集
昭和 2 (1927)	川端 康成	海の火祭	「鮎」の章において、大正10(1921)年著者が3回に渡って岐阜を訪ねた折のことが描かれている。	『中外商業新報』 昭和2年8月13日～12月24日 「鮎」は、後に「南方の火」と改題、改訂し、昭和23年に16巻本『川端康成全集』(新潮社)に収録された。		川端康成全集第22巻 「篝火 非常 南方の火」
昭和 6 (1931)	小島 信夫	春の日曜の一日	著者が岐阜中学校(現県立岐阜高等学校)在学時の作品。主人公が春の晴れた日曜日に、岐阜の方を眺めながらスケッチをする。岐阜から少し離れた場所のようで、北方に第二加納小学校が見えるという描写がある。	『華陽』 昭和6年7月(90号)		小島信夫短篇集成1
昭和 7 (1932)	丹羽 文雄	鮎	岐阜市神明町に住む母親を大学生の息子が訪ねる。著者とその実母がモデルとなっており、この後も、母子の相克という題材が繰り返し描かれている。	『文藝春秋』 昭和7年4月号	文藝春秋	丹羽文雄短篇集 丹羽文雄作品集第1巻 ふるさと文学館第25巻
昭和 9 (1934)	丹羽 文雄	贅肉	著者の実母や実家に起こった出来事を描く「鮎」のエピソードが、さらに詳しく描かれている。	『中央公論』 臨時増刊 新人号 昭和9年7月(560号)	中央公論新社	丹羽文雄作品集第1巻 岐阜県文学全集2 現代日本の文学27
昭和 11 (1936)	十和田 操	判任官の子	岐阜で過ごした少年時代を題材とした著者の代表作。岐阜市内に勤める公務員の子で、洋服に憧れる少年の心が描かれている。	『文学生活』 昭和11年7月号	赤塚書房	十和田操作品集 岐阜県文学全集2 百年文庫79
昭和 14 (1939)	吉川 英治	新書太閤記	豊臣秀吉の波乱万丈の生涯を描いた「秀吉もの」の代表作といわれる。織田信長の関連で岐阜が登場する。	『読売新聞』 昭和14年1月1日～20年8月23日 新聞連載時の作品名は「太閤記」。	新潮社 六興出版部	吉川英治全集第22～25巻 吉川栄治歴史時代文庫22～32

昭和 15 (1940)	十和田 操	二階のない学校	真向かいに刑務所がある「二階のない」小学校が舞台となっており、当時の学校生活が描かれている。著者が通った明德小学校がモデルである。	『文芸汎論』	昭和15年1月 (第10巻第1号)		十和田操作品集
昭和 15 (1940)	小島 信夫	往還	各務原市川島(旧羽島郡川島町)と岐阜市が舞台。岐阜で生育した著者の少年時代の記憶が描かれている。	『崖』	昭和15年2月 (3号)		小島信夫短篇集成1 小島信夫全集4
昭和 23 (1948)	越中谷 利一	柳ヶ瀬付近	プロレタリア作家として活躍した著者の文章で、柳ヶ瀬の喫茶店の描写から始まる。岐阜市の文学の土壌についての批判が中心となっている。	『青春ジャーナル』	昭和23年2月		越中谷利一著作集
昭和 29 (1954)	山岡 荘八	織田信長	現在にいたるまで数多くの文豪や現代作家が題材とする織田信長について、著者は会話を中心とする軽妙な筆致で人物を描写。織田信長が美濃という風土に合った英雄として描かれている。	『小説倶楽部』	昭和29年9月号～35年4月号	大日本雄弁会 講談社	山岡荘八歴史文庫10～15 現代長編文学全集23・24
昭和 30 (1955)	丹羽 文雄	菩提樹	著者の父が主人公のモデルとされ、母が四日市の寺を出奔して岐阜市へやってきたいきさつとして、祖母と父との男女関係が原因であることが描かれている。	『週刊読売』	昭和30年1月16日号～31年1月22日号	新潮社	丹羽文雄作品集第6巻
昭和 30 (1955)	舟橋 聖一	白い魔魚	主人公は東京で大学生活を謳歌していたが、長良川に近い元浜町にある老舗紙問屋である実家の倒産により、岐阜に呼び戻される。昭和30(1955)年当時の鶴岡の情景についても描かれている。	『朝日新聞』 (朝刊)	昭和30年6月8日～31年3月15日	新潮社	現代長編小説全集8
昭和 31 (1956)	丹羽 文雄	母の晩年	岐阜で傘問屋の妾となった母が老いて後、主人公は千葉に建てた隠居所に母を住まわせる。母は、岐阜の知人に長時間電話をしたり、岐阜の料亭の話は何度も繰り返したりし、まわりを困らせるようになる。	『群像』 同年刊行の『さまざまの嘘』に収録。	昭和31年10月号	弥生書房	現代日本の文学27 ふるさと文学館第13号
昭和 37 (1962)	小島 信夫	郷里の言葉	言葉を多重に受けとめる傾向にあった著者によって、父親の死が描かれている。岐阜の方言が卑しい言葉であると書かれている。	『新潮』 昭和40年刊行の『愉しき夫婦』に収録。	昭和37年11月号	学習研究社	小島信夫短篇集成5 昭和文学全集21 新潮日本文学54
昭和 38 (1963)	司馬 遼太郎	国盗り物語	前編は斎藤道三、後編は織田信長の物語。斎藤道三は、時に非情に、時に人情味豊かな、才能溢れる人物として描かれている。道三を主人公に描いた多くの小説の中の代表格である。	『サンデー毎日』	昭和38年8月11日号～41年6月12日号	新潮社	司馬遼太郎全集10・11
昭和 41 (1966)	城山 三郎	風雲に乗る	信用月賦販売会社の社長となる主人公の立志伝。「ランドセル」という章に昭和20(1945)年頃の岐阜駅前や柳ヶ瀬の様子が描かれている。		昭和41年8月	光文社	
昭和 41 (1966)	小島 信夫	階段のあがりはない	著者と重なる主人公の幼い頃の記憶をたどった作品。階段のあがりはないで泣く母の思い出が記され、父親が「岐阜人」で、家の前は傘張屋という描写がある。	『群像』	昭和41年10月号	新潮社	小島信夫全集5 小島信夫短篇集成5 昭和文学全集21
昭和 45 (1970)	丹羽 文雄	太陽蝶	著者の母が、自分の実母(著者の祖母)と夫(著者の父)が不倫をしたという衝撃的な体験を経て、自らは役者と駆け落ちしたことを題材とした一連の作品の一編。岐阜で妾として暮らす母を、大学生の息子が訪ねて来る場面がある。	『家の光』	昭和45年1月号～46年12月号	新潮社	
昭和 45 (1970)	水上 勉	その橋まで	刑期を終えて岐阜刑務所を出た青年と彼を見守る人々、底辺で必死に生きる人物を描く。長良橋からの眺望をはじめ、随所に、主人公の自己存在の確認としての岐阜の風景が描写されている。	『週刊新潮』 連載時の作品名は「あの橋まで」。	昭和45年10月3日号～47年10月14日号	新潮社	新編水上勉全集第1巻
昭和 46 (1971)	平岩 弓枝	彩の女	女は結婚後さまざまな色に染められてゆくというのが題名の由来。婚約者のいる青年を恋した娘と、妻子ある男性を愛した母、母娘二代の哀しい愛と性が描かれている。鶴岡の章で、長良川畔の宿が舞台となっている。	『京都新聞』 (朝刊)	昭和46年4月15日～47年2月11日	文藝春秋	
昭和 46 (1971)	殿岡 辰雄	青春発色	教師として岐阜中学校(現・県立岐阜高等学校)に赴任してきた主人公。洋風の建物が少ない田舎の学校での生活に、下宿先の奉公人との恋が絡んで物語が進んでいく。大正時代の岐阜中学校の状況が描写されている。		昭和46年5月	原田俊文堂	ふるさと文学館第25巻

昭和 46 (1971)	西村 京太郎	悪への招待	父の死の真相を探るべく、主人公と私立探偵が犯人を追って岐阜市玉井町の女子大生を訪ねる。著者は昭和44 (1969) 年に長良川河畔の山下邸を訪ね、うを鉄で夕食をとった。その折に見聞したことをもとにして、岐阜が舞台の推理小説を描いた。	昭和46年8月	講談社	※徳間文庫版所蔵
昭和 48 (1973)	斎藤 栄	真夏の夜の証言	花火大会の行われた横浜で女性が殺され、容疑者としてあがった人物はその日、岐阜に来ていた。長良川ホテル、柳ヶ瀬、長良川河畔などが登場する。	『小説推理』 昭和48年10月号 昭和60年に光文社より刊行された『嫌疑権殺人事件』に収録。	双葉社	※光文社文庫版所蔵
昭和 50 (1975)	山田 智彦	水中庭園	高度経済成長を控えた昭和30 (1955) 年頃、岐阜市から東京の大学に進学した若者を主人公に、若者らしい悩みと真剣に向き合う姿が描かれている。丸物百貨店、喫茶瑪瑙館が登場する。	『文学界』 昭和50年8月号～51年7月号	文藝春秋	岐阜県文学全集3
昭和 52 (1977)	小島 信夫	美濃	著者と思われる小説家の主人公と、郷里の岐阜に居住する詩人の友人との会話を主軸として、岐阜ゆかりの人物の人間模様が描かれている。著者の岐阜を思う心が描かれた小説。実在の場所・人物が多く登場する。	『文体』 昭和52年9月号～55年6月号 連載第5回までは「ルーツ*前書」として掲載されたが、6回以降「美濃」に改題。また昭和56年の単行本化にあたり、「モンマルトルの丘」(『文藝』昭和53年1月)を加え、再編集。	平凡社	小島信夫長篇集成3
昭和 52 (1977)	神山 圭介	英霊たちの応援歌	県立岐阜商業高校野球部の卒業生をはじめとする大学野球の選手たちが、特攻隊員として南の海に散っていった物語。故郷を懐かしみ、長良川と金華山の風景を回想する場面がある。	『別冊文藝春秋』 昭和52年12月 (142号)	文藝春秋	
昭和 53 (1978)	杉森 久英	天皇の料理番	宮内省大膳職司厨長を務めた秋山徳蔵の青年期から主厨長になるまでを描いた作品。大正11 (1922) 年英国の皇太子が日本を訪問し、日本の伝統的な漁である長良川の鵜飼を見物した場面がある。	『週刊読売』 昭和53年10月1日号～54年11月25日号	集英社	
昭和 53 (1978)	西村 京太郎	イヴが死んだ夜	十津川警部が、浅草寺境内での殺人事件の被害者は岐阜市内の旧家の長女であると推理し、岐阜にやって来る。家出した岐阜の良家の娘がなぜ「イヴ」と呼ばれ、殺されることになったのかが追及される。	昭和53年11月	集英社	※角川文庫版所蔵
昭和 56 (1981)	花登 筐	問屋町の女	戦後の問屋町で婦人服製造の会社を立ち上げた原瀬重子さんがモデル。昭和50 (1975) 年、著者が講演のため来岐した際に聞いた話が元となっている。	『公明新聞』 昭和56年6月2日～57年12月29日	集英社	
昭和 57 (1982)	水上 勉	長い橋	非行を重ねる薄幸の少女を見守る保護司と和尚。川の真ん中あたりで切れていて、向こうへ渡れない「長い橋」に人生が重ねられている。岐阜で始まり岐阜で終わる物語。	『日本経済新聞』 (朝刊) 昭和57年5月10日～58年5月31日	新潮社	
昭和 57 (1982)	色川 武大	連笑	無頼の日々を過ごす主人公が、交通事故にあった弟に会いに岐阜市を訪れる。子供の頃からの弟との関係や絆を描いた作品で、著者自身の人生が重ねられている。岐阜市の町並みや競輪場が登場する。	昭和57年10月	新潮社	百年文庫92
昭和 60 (1985)	山田 智彦	マジャールの女	岐阜市鏡島の旧家に生まれた主人公が、第二次世界大戦後のベルリン時代、ハンガリー (マジャール) の女性と結ばれる。岐阜に嫁いで来た彼女と、彼女を迎えた人たちが描かれている。	『中日新聞』 『東京新聞』 『北海道新聞』 『西日本新聞』 (全て朝刊) 昭和60年1月1日～12月31日	新潮社	
昭和 62 (1987)	内田 康夫	美濃路殺人事件	行方不明になった父を訪ねて娘が岐阜へやって来るが、やがて父は長良川で死体となって発見される。浅見光彦シリーズの一作で、岐阜市歴史博物館や岐阜グランドホテルが登場する。	昭和62年4月	徳間書店	
昭和 62 (1987)	福田 洋	岐阜金華山殺人事件	金華山山頂で発生した殺人事件で、警視庁捜査一課の女性刑事が活躍する。重要参考人として浮かんだのが、都内で自殺した男で、東京と岐阜でほぼ同時に発生した2つの事件の接点が追及される。	昭和62年8月	勁文社	
昭和 62 (1987)	小杉 健治	東京ー岐阜Σ0秒の罠	詐欺商法による悪徳会社の会長が殺され、専務に容疑がかかる。有罪を信じる刑事と、無実を証明しようとする女性弁護士をめぐる推理小説。主人公が幼馴染の男性と長良橋の上で待ち合わせる場面がある。	昭和62年10月	光文社	
昭和 63 (1988)	山浦 弘靖	東名高速殺人事件	高速道路で起こった事故がきっかけで、東名高速が通る各県をまたいだ大きな事件が発覚する。捜査対象がいる岐阜にも、主人公がやって来る。著者がイメージする岐阜の風土が描かれている。	昭和63年9月	光文社	

平成 3 (1991)	高橋 治	春朧	長良川畔の旅館の若女将の奮闘記。主婦業に専念していた主人公が、夫の急死により素人同然の身で若女将となる。平成3(1991)年に杉山旅館に宿泊した著者が、女将から聞いた苦労話を元に描いた。	『日本経済新聞』 (夕刊)	平成3年5月7日～4年8月8日	日本経済新聞社	
平成 4 (1992)	梓 林太郎	長良川美女の交錯	旅行作家である主人公の助手の女性が、岐阜市内で失踪した。金華山などを捜索した結果、長良川で男性の刺殺体が見つかり、傍に助手の女性のハンカチが落ちていた。著者による本格推理「川シリーズ」の一作。		平成4年10月 平成10年に『長良川殺人事件』へ改題。	祥伝社	
平成 5 (1993)	山村 美紗	長良川鵜飼殺人事件	鵜がとった鮎の腹から、京都の宝石店で盗まれたルビーが発見される。アメリカ人のキャサリンと日本の恋人は、長良川で鵜飼を見物をし、事件を推理する。	『野性時代』	平成5年7・11月号～6年3・6月号	角川書店	
平成 12 (2000)	西村 京太郎	十津川警部 長良川に犯人を追う	上野公園で焼死したホームレスの男性が長良川周辺の出身だと推理し、岐阜で調査をした新聞記者が殺される。真相を闇に葬ろうとする巨大な力に阻まれながら、十津川警部が岐阜で捜査を進める。	『小説宝石』	平成12年2月号～8月号	光文社	
平成 21 (2009)	西村 京太郎	十津川警部 長良川心中	長良川鵜飼の最中に屋形船で男女のカップルが意識不明になり、女性が亡くなる。同一の睡眠薬を用いた別の事件が起こり、十津川警部は偽装殺人を疑い捜査を開始する。	『Web小説中公』	平成21年6月号～12月号	中央公論新社	※新潮文庫版所蔵
平成 21 (2009)	原田 マハ	長良川	娘とその婚約者とともに長良川鵜飼を見に来た母。水団扇や鵜飼を楽しむ中で、癌で亡くなった夫との旅を思い、いくつもの生命が息づいていると夫が語った川の風景に想いを馳せる。	『ジェイ・ノベル』	平成21年9月号 平成22年刊行の『星がひとつほしいとの祈り』に収録。	実業之日本社	
平成 24 (2012)	奥田 英朗	噂の女	高校までは地味だったにもかかわらず短大時代に変身を遂げた、黒い噂がまつわる女が高級クラブのママののし上がっていくまでを描く。クラブがある柳ヶ瀬や金華山が登場する。	『yom yom』 『小説新潮』	2009年12月号、2010年7月号、2010年12月号～2011年12月号 2012年3月号、5月号、7月号	新潮社	
平成 28 (2016)	早見 俊	うつせ世に立つ	岐阜市・信長公450プロジェクトとの特別コラボ企画による作品。帰蝶や安楽庵 策伍のほか、架空の人物も織り交ぜて登場させながら、美濃入国後の岐阜での信長像を描く。		平成28年9月	徳間書店	
令和 3 (2021)	秦 建日子	女子大小路の 名探偵	名古屋栄で起こった連続女児殺人事件の容疑者とされてしまった主人公が、姉や地元愛あふれる仲間たちとともに事件に立ち向かう。主人公の実家が岐阜市で、姉は柳ヶ瀬の店で働いている。	『NAGOYA FURIMO』 『GIFUTO』 『たんとんくらぶ』	2020年4月号～2021年4月号	河出書房新社	

令和4年3月 岐阜市立図書館作成